

# 国語 試験問題

二月一日実施

## 注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十八ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄らんに記入しなさい。

京華中学校

受験番号

氏名

余白

問題は次のページから始まります。

余白

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

それからぼくたちは自分のクラスのことや最近のできごとについて話をした。ぼくがまだバスケ部にいたころの、練習前や休憩時間とおなじように。

なのにぼくは仲間たちとのあいだに、これまでではなかった距離を感じていた。それはきつと、ぼくがみんなに隠していることがあるから。そしてみんながぼくに気を遣ってくれているからだ。その証拠に、ぼくの脚や退部のことには、だれも触れようとはしない。

しばらく話したところで、ふいに会話が途切れた。一年生がスリーポイントシュートを決めて歓声をあげた。ぼくがそつちに注目するふりをして、気まずさをまぎらわせていると、満が「慎吾」と話しかけてきた。不安をこらえるような、硬い表情で。

「おまえの脚のことを聞いたときから、謝らないととずっと思ってたんだ。成長痛だろうなんて適当なことをいって、ほんとうに悪かった。あのとときすぐに病院に行くようにすすめてれば、部を辞めなくてすんだかもしれないの……」

「えっ、そんなの謝ることないよ。ぼくだって、自分の脚が退部しなきゃいけないほどひどい状態になってるなんて思ってもいかなかったんだから」

慌ててそういいかえしても、満の顔は晴れなかった。満だけじゃなくて、ほかのみんなもおなじように沈んだ顔をしていた。

バリーが A ぼくにいった。

「けだよお、慎吾、最近ずつとおれらのことを避けてたろ。だからやっぱそのことで怒ってんじゃないかと思ってよお」

「誤解だよ！ ぼくがみんなと顔を合わせづらかったのは、ただ、バスケ部を辞めたことがうしろめたかったからなんだ」

口にした瞬間に、いってしまった、と思った。うろたえているぼくに、バリーが首を傾げて聞きかえしてきた。

2 「なんでだよ。退部は脚のせいなんだからしようがないだろ。うしろめたさなんて感じる必要ないじゃん」

ほんとうのことを、正直に話さなくちゃいけない。たとえみんなに軽蔑されたとしても。そうしなければ、きつとこれからもみんなに、ぼくのことと責任を感じさせてしまう。

仲間たちの視線から逃れてうつむくと、ぼくはおそるおそるそのことを明かした。

「たしかに、脚のせいなんだけどさ。親とか医者に退部をすすめられたとき、ぼくははつきり嫌<sup>いや</sup>だつていわなかったんだ。続けようとしていけば、続けられたかもしれないのに。だからもしかするとぼくは、心の底でバスケット部を辞めたがつてたのかもしれないって、そう思ってるんだよ。いくら練習してもみんなみたいにうまくなれないから、それがつらくて部活から逃げたんじゃないか、って……」

言葉を終えたあとも、ぼくはみんなの反応が怖<sup>こわ</sup>くてうつつむいたままだった。ぼくが B しながら沈黙<sup>ちんもく</sup>に耐<sup>た</sup>えていると、満が最初に口を開いた。

「慎吾はそういうことはしないだろう」

それはまるで、ぼくがなにかおかしなことをいったかのような口調だった。驚<sup>おどろ</sup>いて顔を上げると、満は明らかに戸惑<sup>とど</sup>った表情を浮かべていた。

雅人が「だよな」と相槌<sup>あいづち</sup>を打ってぼくの顔を見た。

「おまえ、本気でそんなこと気に病<sup>や</sup>んでたのかよ。おまえみたいに真面目で練習熱心なやつが、まだ頑張<sup>がんば</sup>れるのに怪我<sup>けが</sup>のせいであきらめたりするわけないだろ」

バリーともつきさんもしきりにうなずいていた。その反応を目にしたとたん、胸<sup>3</sup>の底から熱いものがこみあげてきた。

正直、ぼくはみんなのことを疑っていた。あいつは怪我を理由にしてバスケット部から逃げた。そう思われているんじゃないかと想像して怖かった。

だけど、そんなことはなかったんだ。ぼくはずっと自分の本心を疑い続けていたのに、みんなはいまでもぼくのことを信頼<sup>しんらい</sup>してくれていたんだ。

ありがとう、とぼくは心からみんなに感謝した。なにいつてんだよ、と雅人が茶化すようにぼくの肩<sup>かた</sup>を揺さぶってくる。「……もつとみんなとバスケットをしたかったな」

みんなの顔を見ていたら泣いてしまいそうで、ぼくはステージの床<sup>ゆか</sup>を見つめてつぶやいた。退部から半月以上がたつてようやく、ぼくは自分のほんとうの気持ちに気がついた。

バスケット部の仲間と話してから数日がたって、部活の体験入部期間も終わりが近づいてきた。けれどぼくはまだ、吹奏楽部<sup>4</sup>に入るかどうか迷い続けていた。

給食の時間、ぼくは机を班の形に動かしながら、小宮山さんの顔を盗み見<sup>ぬすみ</sup>た。せっかく誘<sup>さそ</sup>ってもらったのに、いつまでた

つても入部の返事ができなくて申し訳ないな。いや、もうとっくに期待されていないのかもしれないけど。

ごめんね、と胸の中で小宮山さんに謝って、ぼくは給食をもらいに席を立った。

吹奏楽部に勧誘かんゆうされていることは、バスケット部の仲間たちにも話した。ぼくが入部を迷っていることを明かすと、みんなはそろってぼくの背中を押おしてくれた。

「いいじゃん吹奏楽部。おれらが全国大会に出場したとき、慎吾が吹奏楽部で応援おうえんの演奏をしてくれたらすっげえ感動的じゃね？」

「全国大会はともかく、慎吾は努力家だから、二年から始めてもちゃんと活躍かつやくできるだろう」

雅人や満にそういつてもらっても、ぼくが入部を決められなかったのは、心の底にあった願いに気づいたせいだ。もっとみんなといっしょにバスケット部がしたい、という願いに。

ぼくのひぎの異常は、成長期が終わると自然によくなることが多いらしい。だからもし早めに成長期が終われば、バスケット部に復帰することもできるかもしれない。

とはいえもちろん、ひぎが治らないまま中学校生活が終わってしまう可能性も高い。吹奏楽をやってみたいという気持ちもある。だけどやっぱりバスケット部復帰もあきらめきれなくて、もうどっちにしたらいいか全然わからなかった。ああ、まったくほんとうに、どうしてぼくはこうなんだろう。

悩みなやが続いているうちに、いつのまにか給食はもう終わり終わっていた。トレイに載のっているのは、中華ちゅうか麺めんと味噌みそラーメンのスープ、春巻きとミニトマトとアーモンドフィッシュだった。

自分の席にもどったあと、ぼくはそのアーモンドフィッシュふくろの袋を見つめながら、再びバスケット部のみんなとの会話を思い出した。

「もうさ、どうしても決められないんだったら、コインの裏表とかで決めちゃえばいいんじゃないやねえの？」

煮にえきらない態度を続けるぼくに、バリーがしびれをさらしたようにいった。

「えっ、それはちよつと適當すぎるような……」

「適當あただけど、悩んでる時間がもつたいたいだろ。入部するなら早いほうが絶対いいだろうしさ。なんならいま決めちゃう？コインならおれ持つてるぜ？」

せっかちなバリーがカバンの中を漁あさりはじめる。ぼくがそれを見ておろしていると、雅人が「待て待て」とバリーを止めた。

「コインの裏表なんてありきたりでおもしろみに欠けるだろ。どうせならもつと特別感のある決めかたをしようぜ」  
「特別感のある決めかたって、例えばどんなだよ？」

雅人が「そうだなあ」と考えこんだ。そしてぼんつ、と手を打ってこたえる。

「例えばあれだ。給食のカレーに入ってる肉の数が奇数か偶数か、とか」

「カレーってきょう食ったばっかじゃん！ 次に出るまで決められないじゃないかよ！」

「カレーがだめなら、ABCスープのうずらの卵の数とか、フルーツポンチの寒天の数とかでもいいんじゃないか？」

「なんで給食限定なんだよ。雅人おまえ、いま絶対腹減ってるだろ」

雅人が「ばれたか」と舌を出すと、もっさんが「じゃあこれ食べる？」とどこからか干からびた給食のコッペパンの袋を持ってきた。そのコッペパンをめぐってどたばた騒いでいるうちに、先輩たちが体育館にやってきて、みんなとの会話はそこでおしまいになった。

いまになって思うと、あるとき雅人は本気であんなギャグみたいな決めかたを提案したわけじゃなくて、ただ話をぐだぐだにすることで、決断を急かそうとするバリーから、ぼくをかばってくれたのかもしれない。けれどぼくはそのアイデアを思いだして、アーモンドフィッシュの袋を手に「C」つぶやいた。

「……アーモンドフィッシュのアーモンドが、奇数か偶数か」

自分の意志で決めないと、また後々まで後悔しそうな予感もあった。だけどこれだけ悩んでも決められないんだから、もうしようがないじゃないか。

5  
いただきますのあいさつで給食が始まると、ぼくは意を決してアーモンドフィッシュの袋を開けた。そして中に入っているアーモンドの数を数えはじめた。奇数だったら吹奏楽部に入部する。偶数だったら入部しない。頭の中でそう決めて。

ほかのメニューに手をつけようともせず、真剣な顔でアーモンドの数をたしかめているぼくは、はたから見たら確実に変なやつだ。けれどそんなことも気にならないほど、ぼくはアーモンドを数えることに集中していた。

トレイにならべたアーモンドが七個になり、八個に増え、それ以上は袋の中をよくたしかめても、アーモンドはもう見つからなかった。八個、偶数だ。吹奏楽部には入部しない。

ぼくは緊張でつめていた息を吐きだした。なんとなくもやもやするけど、そういうふうに決まったんだからしかたがない。ぼくは自分にいきかせて、給食を食べはじめようとした。

そのとき、となりの席の北野くんが、アーモンドフィッシュの袋を破くのを失敗して、中身を派手にばらまいた。

「うわっ、悪い！」

北野くんが散らばったアーモンドフィッシュを慌てて回収する。そのあとでぼくは、自分の制服のズボンに、飛んできたアーモンドがひとつ、載っているのを発見した。

すぐに北野くんに知らせようとして、ぼくは思い留まった。この一個を含めれば、アーモンドの数は奇数になる。

そのことに気がついた瞬間、ぼくはほっとため息をついていた。それといっしょに、うれしさがわきあがってくる。

なんだ、**D** 悩み続けていたくせに、ほんとうはどうしたいのか、とつくに決まっていたんじゃないか。自分にあきれてくすつと笑うと、ぼくは飛んできたアーモンドをトレイの列に加えた。そしてまた迷いはじめたりしないうちに、小宮山さんに話しかける。

「小宮山さん、きょうの放課後、また吹奏楽部の見学に行ってもいい？ ずっと悩んでただけど、やっぱり吹奏楽部に入部することにしてようと思って」

小宮山さんが春巻きを口に運びかけたまま、呆気にとられた顔でぼくのことを見つめた。いくらなんでも急すぎたかなと、その反応を見てぼくは恥ずかしくなった。

けれどそのうち小宮山さんは顔を輝かせて、「うんっ、もちろん！」とうなずいてくれた。ぼくもつられて笑顔になると、トレイにならべたアーモンドをつまんで食べた。

ぼくの気持ちを教えてくれたアーモンドが、口の中でカリッと音を立てて砕けた。

(如月かずさ『給食アンサンブル2』による)

1. **A** **D** にあてはまる言葉として適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

ア ぐずぐず    イ びくびく    ウ おずおずと    エ ぼつりと

2. **□** にあてはまる四字熟語として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 大胆不敵    イ 疑心暗鬼    ウ 優柔不断    エ 八方美人

3. ——— 線部1に「満だけじゃなくて、ほかのみんなもおなじように沈んだ顔をしていた」とありますが、その理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 慎吾の怪我についてなくさめの言葉をかけなかったことが原因で、慎吾を退部に追<sup>お</sup>い込<sup>こ</sup>んでしまったことに対して責<sup>せ</sup>任を感じているから。

イ 自分たちが慎吾の足の怪我を大したことはないと考えて、通院をすすめなかったせいで退部することになったため、慎吾が腹を立てていると考えているから。

ウ 退部したことに對して慎吾がうしろめたく思っていることを察して、次の部活が決まるまでそつと見守ることにしようと考えているから。

エ 慎吾が怪我をして退部を決断するとき引き留めることができなかったので、以前と同じように接することにうしろめたさを感じているから。

4. ——— 線部2「ほんとうのこと」とは、どのようなことですか。解答欄に合うように四十字以内で答えなさい。

5. ——— 線部3に「胸の底から熱いものがこみあげてきた」とありますが、その理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア みんなから成長痛のせいで部活を辞めた薄<sup>はく</sup>情<sup>じょう</sup>者<sup>もの</sup>だと思われると「ぼく」は考えていたが、実際には「ぼく」を今でも部活の仲間として受け入れようとしていることがわかったから。

イ みんなから怪我で部活を辞めた弱虫だと思われると「ぼく」は考えていたが、実際には「ぼく」を励<sup>はげ</sup>ましもう一度バスケット部<sup>もじ</sup>に戻<sup>もど</sup>って来てくれると信じてくれることがわかったから。

ウ みんなから能力に限界を感じて部活を辞めた根<sup>こん</sup>性<sup>じょう</sup>なしだと思われると「ぼく」は考えていたが、実際には「ぼく」をバスケット部に貪<sup>どん</sup>欲<sup>よく</sup>な努力家だと認めてくれてることがわかったから。

エ みんなから怪我で部活を辞めた意<sup>い</sup>気<sup>き</sup>地<sup>じ</sup>なしだと思われると「ぼく」は考えていたが、実際には「ぼく」がバスケットから逃げるような人物ではないと信頼してくれていることがわかったから。

6. ——— 線部4に「吹奏楽部に入るかどうか迷い続けていた」とありますが、その理由として適当なものを二つ選び、番号で答えなさい。

ア 吹奏楽部から勧誘されたが、バスケット部を途中で退部したときと同じように、周囲の期待を裏切ることになりかねないから心配だから。

イ 吹奏楽をやってみたい気持ちはあるが、脚の状態が早くよくなる可能性もあるため、卒業前までに再びバスケット部に復帰するという希望を捨てきれないから。

ウ 脚が治ることを期待してバスケット部への復帰を考えているが、バスケット部の仲間の後押しをうけて、より自分を歓迎してくれる吹奏楽部に気持ちがかたむいているから。

エ バスケット部が全国大会に出場した際に応援の演奏を試してみたいが、今までバスケット部の経験しかないため、今から吹奏楽を始めて活躍できるのか不安だから。

オ バスケット部の仲間と距離をとっていたが、彼らと話をしたことで自分のほんとうの気持ちに気がついて、もう一度一緒にバスケットをしたくなったから。

7. ——— 線部5に「ぼくは意を決してアーモンドフィッシュの袋を開けた」とありますが、ここからの「ぼく」の気持ちの変化を説明した次の文章の I・II にあてはまる言葉として適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

どのような結果になるのか緊張しながらアーモンドを数えた末に、吹奏楽部には入部しないことになったが、I。しかし北野くんのアクセントによって、アーモンドの数が奇数になることに気づいて安堵した。II。それと同時にうれしさがわき上がってきて、II。

I ア 結果については変えることはできないので、いさぎよ潔く受け入れている

イ 結果についてはコインの裏表で決めるべきだったと後悔している

ウ 結果については心が晴れない自分がいることに気づいている

エ 結果については予想通りになってよかったと納得している

II ア 吹奏楽部に入部したいという本心を持つ自分に気づいた

イ 吹奏楽部に入部したいという願いを改めてか噛みしめている

ウ バスケットと決別する理由を求めている自分に気づいた

エ バスケットの仲間に対する感謝を改めて噛みしめている

8. この文章の表現の特徴とくちょうとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 「おそろおそろ」や「おろおろ」などの擬態語ぎたいごを多用することで、「ぼく」の不安な気持ちきもちが強調されている。

イ 「ぼく」の発言の中に「……」を多用することで、揺れ動く「ぼく」の気持ちきもちが読者に伝わりやすくなっている。

ウ 複数の人物が登場することで、「ぼく」が多くの仲間なかまに囲まれる中で成長していく姿すがたが描かれている。

エ 「ぼく」の心の中の声こゝろのこゑが会話文以外にも描かれることで、読者が「ぼく」の気持ちきもちを理解しやすくなっている。

## 二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

他の個体との付き合い方としては大きく3通りありえます。仲良くなるか、無視するか、敵対するかです。<sup>1</sup>

昆虫ほどの小型の多細胞生物の場合は、敵対するか無視をします。たとえばカブトムシやクワガタムシのように樹液を食べる生物の場合は、限られた樹液を取り合うために争うことがあります。子どものころにカブトムシどうしを戦わせるカブトムシ相撲をしたことがある人もいないでしょうか。カブトムシ以外にも、同性の他個体と出会うと戦う昆虫はいくつか知られていて、昆虫相撲として競技になっているものもあります。有名なところでは中国のコオロギを戦わせるものがありますし、日本でもコガネグモを戦わせる競技があります。

ただ、このような一部の昆虫を除くと、ほとんどの昆虫は同性の他の個体と出会うと特に何もせず無視をします。虫取りをしてセミやバッタを何匹も捕まえて虫かごに入れておいても、彼らはお互いなんの干渉もしません。公園などで観察してみると、地面にはいろいろな種類のアリが走り回っています。ときどきアリどうしがぶつかることもありますが、何事もなかったかのように通り過ぎていきます。彼らは餌以外のものには興味がないように見えます。このようなふるまいは合理的です。普通の生物にとつて、餌にもならず、交配相手にもならない生物にかかわるメリットは何もないからです。

イヌやネコなどある程度の知能と社会性をもった生き物には、仲良くなるケースも見ることが出来ます。散歩中のイヌを見てみると、犬友達 というのでしょいか、飼い主どうしが話している間、兄弟でもないだろうに仲良くじゃれあっているイヌを見ることがあります。逆に、吠えかかっている様子や、片方は近づいていくのにもう片方が嫌そうに離れていくのもよく見かけます。昔、私の実家では2匹のネコを飼っていたのですが、この2匹は仲が悪く、出会うとすぐに喧嘩をするので1階と2階に分けて飼っていました。イヌやネコくらいになると、餌にも交配相手にもならない生物にも好き嫌いが出てくるようです。

野生では敵対的なケースも多く観察されます。たとえば、イヌの祖先種であるオオカミであれば、多くの場合、オスとメスのつがいを中心とした血縁関係のある個体どうしで群れを作ります。もしその群れに属さないオオカミと出会ったならば、縄張りに対する侵入者です。威嚇や攻撃をされ、追い払われます。ネコ科のライオンでも一般的に群れの中にはオスは1頭か2、3頭の兄弟で、他のオスがやってきたら争いになります。

こうした縄張りを持つ生物であれば、同性の非血縁個体に出会うということは、縄張りに侵入されたということですので、

戦って追い出す必要があります。ペットとして買われているイヌが別個体とも仲良くなれるのは、餌の心配がなく、縄張りを守る必要がないうえ、ボスの飼い主どうしが仲良くしていることから同じ群れのメンバーだとみなしているのかもしれない。

イヌやネコなどに対して、現代の人間の場合は、<sup>2</sup>初対面の人に威嚇や攻撃など敵対的な行動をすることはまずありません。小さな子どもどうしであればありえるかもしれませんが、普通の大人であれば、失礼のない程度に愛想よくするのではないのでしょうか。

どのくらい愛想よくするかは、「その人とまた会うかどうか」も重要なポイントになっているように思います。A、近所に住んでいる人や、学校の同級生、あるいは会社の同僚など毎日のように顔を合わせる人であれば、敵対していてもいいことは何もありません。もし敵対していたら、顔を合わせるたびに嫌な気分になってしまいますし、困ったときに助けられないかもしれないかもしれません。多くの人は、頻繁に会う人たちとはできるだけ仲良くするように、少なくとも険悪な関係にならないように努力するのではないかと思います。

それでは近所の人ではなく、旅先でたまたま出会った人であればどうでしょうか。たとえ険悪な雰囲気になったとしても二度と会うことはありません。失礼のない程度の付き合いはするにしても、良好な関係を築く必要性は感じないのではないのでしょうか。

このように、今後もつきあう可能性がある人とならない人で態度を変えることは、いたって合理的です。この傾向は「進化ゲーム理論」という理論的な研究でも確かめられています。同じ個体と長く付き合い合えば付き合い合うほど、協調的な行動が有利に働くことから、付き合いの長さが安定な協力関係を生み出すひとつの要因になることが分かっています。

そして付き合いの長さに大きく影響を与えるのは寿命の長さです。寿命の長い生物どうしは生涯でまた出会う可能性が高まります。人間は長生きで成長に時間のかかる生物です。これは少産少死の戦略によるものです。その結果として同じ他人と長く付き合い合うことになり、敵対したり無視したりするよりも仲良くなって協力し合うほうがお互いの生存に有利になっています。こうして人間の場合は、血縁関係にない個体との協力関係が発展してきたと考えられています。

現在の人間たちの協力の最たるものは「職業」です。多くの人は職を持っていて、特定の仕事をすることで生きていけるようになっていきます。私の場合であれば大学教員ですので、大学で講義をしたり、研究をしているだけで給料をもらって、衣食住を賄うことができます。私が身に着けている衣服も毎日食べている食料も、住んでいる家も、自分で作ったものではありません。作ろうと思っても質の高いものは作ることができません。その代わりに他のもっと技術のある人間が仕事と

して作ってくれたものを買っています。

現代人には当たり前すぎて普段はあまり意識しないかもしれませんが、これは大きな協力関係です。皆が自分以外の誰かのために質の高い仕事をする<sup>3</sup>ことで、全員が安全で快適な生活を送ることができています。

職業という協力関係の重要さは、誰かが仕事を辞めたらどうなるかを考えるとすぐにわかります。たとえば、衣服を作る仕事の人が全員辞めてしまったら、みんな自分の服は自分で作らないといけなくなりそうです。きつと粗末な衣服しか作れないことでしょうか。忙しい人は全く作れないかもしれません。着替えを用意しておくのも大変ですし、洗っているうちにぼろになるでしょうから、洗濯もあまりしなくなるでしょう。衣服は汚れ、感染症も広まりやすくなるかもしれません。現代人が安く品質の高い衣服を手に入れることができるのは、作ることに特化した人が専門に作ってくれるおかげです。

**B** それは一方的な関係ではありません。衣服を作る人も食料や住居は別の専門家に作ってもらっています。私たちは人間は、現在、社会という大きな協力関係の網の網の中に組み込まれています<sup>4</sup>。

「社会の中に組み込まれる」ということは「社会の歯車になる」ということです。この言葉にはあまりいい印象はないかもしれませんが。自分の個性とかアイデンティティがおびやかされると感じるかもしれません。しかしそれは誤解だと私は思います。むしろ社会の歯車になることでほとんどの人は個性を發揮して、みんなの役に立てるのだと思います。

たとえば、社会が全く存在しない状況を考えてみましょう。父親、母親、小さい子どもの3人家族だけで無人島で暮らしているような状況です。この場合、生きていくために必要な仕事はすべて3人だけで分担しないといけません。狩りをするのは、生物的に力の強い大人の男性である父親になるでしょう。植物や果物を採集したり、調理したりするのは、狩りに不向きな女性や子どもの仕事になるでしょう。たとえ、狩りなんて荒っぽいことが嫌いな男性や、採集よりも狩りの方が好きな女性だったとしても、餓えないためには身体的に向いている方をやらざるをえません。狩りに失敗したり、食べ物を見つけないことに失敗したりすれば、すぐに命の危機が訪れます。また、この世界では、勉強が得意とか、絵をかくのが得意とか、コミュニケーション能力が高いとか低いなどの個性が役に立つことはありません。なにより必要なのは、獲物をしとめたり、食料を確保する能力です。力や体力が何よりも重要です。強く丈夫で健康な人間だけが生き残る世界です。それ以外の個性には出番はありません。

一方で私たちの社会は違います。力や体力が必要な職業もあれば、勉強や絵を描くことやコミュニケーション能力が必要な職業もあります。どれか1つの能力が優れていれば、十分に活躍の場が見つかります。少なくとも狩猟採集社会よりは、今の社会の方が自分に合った役割（歯車）が見つかる可能性が高いように思います。

こうした他人との協力からなる社会を形成するようになる、人間という生物が増える単位も変わってきます。人間以前の生き物は自分の力で自分だけを増やしていました。細菌も線虫もカエルも虫もサルも、増えることができるかどうかは自分の能力や運によって決まっています。優れた能力を持っていれば生殖に成功し、子孫を作ることができますし、そうでなければ血統は途絶えてしまいます。

〔C〕協力関係の網の目の中にいる人間は違います。自分が生き残って増えるためには他の人の能力も重要です。また自分の能力もほかの人が生き残って増えることに貢献しています。自分の命が大事なと同じように、他の人の命も大事になっていきます。増える単位が自分の体を超えて広がっているといいかもしれません。

このような大規模な協力関係は人間ならではの特徴です。人間以外の生物が非血縁個体と協力することは、特殊なケースを除いてほとんどありません。なぜ人間のみでこのような特殊な能力が生まれたのかについてはいろいろな説があります。人間の持つ高度な言語能力や認知能力や寿命の長さが大事だったと言われています。また、それらの能力が生まれた背景には、狩猟採集生活の中で協力する必要性があったことや、子どもが成長するまでに時間がかかることから子育てに他の個体の協力が必要だったことなどが指摘されています。

このような性質のどれが直接的な原因だったのかはわかりませんが、いずれにせよ、このような他の個体との協力を可能とする人間の性質は、元をたどれば少産少死の戦略によってもたらされたものです。命を大事にして長く生きるようになり、他個体と付き合うことが可能になったために協力することが有利になりました。

しかも、人間には他者を認識する知能や、他者の気持ちを察することのできる共感能力も備わっています。結果として協力が関係がどんどん発展していきました。私たち人間は地球上の他のどんな生物よりも協力的な、いわば「やさしい」生物です。このようなやさしさの進化は少産少死の戦略を極めてきた生物にとって必然だったように思えます。

（市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』による）

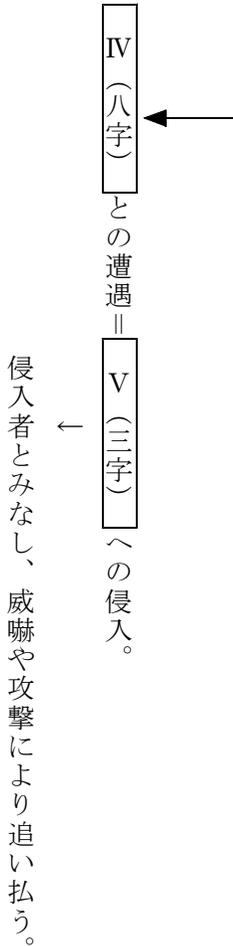
1. A C にあてはまる言葉として適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。  
ア たとえば イ そして ウ つまり エ ところが

2. ——— 線部1に「仲良くなるか、無視するか、敵対するか」とありますが、このことについて次のようにノートにまとめました。I V にあてはまる言葉を、指定字数でそれぞれ抜き出しなさい。

● 小型の同性の多細胞生物……他の個体と遭遇しても特に何もせず無視をする。(例) セミ、アリ  
〈理由〉 I (十七字) から。

● II (六字) をもつ生物……仲良くなる場合もある。(例) イヌ、ネコ  
〈理由〉 相性や飼い主どうしの関係性などにより状況は異なるが、他個体とも仲良くなれるのは、飼い主どうしが仲良しだと同じ群れの仲間とみなしたり、好き嫌いが生じたりするから。

● 野生動物……敵対する場合が多くある。(例) オオカミ、ライオン  
〈理由〉 つがいを中心とした III (十二字) で群れるから。



3. ———線部2に「現代の人間の場合は、初対面の人に威嚇や攻撃など敵対的な行動をすることはまずありません」とありますが、その理由を説明したものととして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 人間は寿命が長く、成長に時間がかかる生物であるため、すべての人と協力関係を築いていたほうがよいから。

イ 人間は寿命が長く、初対面の人とは二度と会わない可能性があるため、敵対的な行動をとる必要性がないから。

ウ 人間は寿命が長く、合理的に物事を考える生物であるため、他の人との関係性により態度を変えるものだから。

エ 人間は寿命が長く、一度出会った人と再会する可能性があるため、険悪な関係にならないほうがよいから。

4. ———線部3「職業という協力関係」を説明したものととして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 皆が与えられた仕事をするだけで生きていくことができる関係。

イ 皆が生きていくために質の高い仕事を相互的（そうごてき）に行っている関係。

ウ 皆が自分の快適な生活を維持（いじ）するために特定の仕事をやる関係。

エ 皆が個性を発揮して専門性の高い仕事を一方的に行っている関係。

5. ———線部4に『「社会の歯車になる」』とありますが、筆者がいう「社会の歯車になる」とはどういうことですか。二十五字以内で答えなさい。

6. ———線部5に「『やさしい』生物」とありますが、筆者が人間をそのように述べる理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 人間は高い知能と相手の気持ちをくみ取る共感能力を持っており、協力関係の構築のために他者の命を最優先させる生物だから。

イ 人間は寿命の長さから他の生物よりも多くの個体と関係を築くため、他者の気持ちを察しながら接することができる生物だから。

ウ 人間は他の生物とは異なる知性だけでなく相手の気持ちを理解できる能力を持ち、生存のために他の個体との関係を強化させる生物だから。

エ 人間は言語によって他者の心情を推測する知力を持っており、他者との協力関係を最もうまく作り上げることができる生物だから。

7. 本文の内容としてあてはまるものには○、そうでないものには×をそれぞれつけなさい。

ア 安定した協力関係の構築には協同的な行動が有利に働くため、人見知りをせず他者と交流する必要がある。

イ 人間は狩猟採集社会において、それぞれが身体的に向いている役割を担うことで生き残ることができていた。

ウ 人間にしか備わっていない高いコミュニケーション能力により、少産少死の戦略を成立させてきた。

エ 人間は非血縁個体との協力関係を発展させてきたことで、社会の中に組み込まれる存在になっていった。

オ 人間は大規模な協力関係という特徴を持ち、他の生物と協力することで自身の命を守って種を増やしてきた。

三、次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 経費を横領する。
- ② 呼応の副詞。
- ③ クリスマスはキリストの降誕記念日だ。
- ④ お墓に花を供える。
- ⑤ 五十人の選手を率いる。

四、次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① サンパイ客でにぎわう神社。
- ② ヒキョウを目指して旅する。
- ③ ガイトウを新しく設置する。
- ④ 知性にトんだ発言。
- ⑤ ホトケの顔も三度まで。